

未亡人 (九三六卷)

帝キネ時代映畫

原作並脚色者

監督者

撮影者

主演者

前田重信
高見貞衛
鍋本榮一
鈴木澄子
第四百三號

紹介 かなりな事件の重疊や物語の波瀾を企圖して作者はこゝ物語を書いたらしい。仲々義理人情を絡みに絡ませた組立てである。そして凡ゆる機會に觀客をほら／＼させ、泣かせやうと企てゝ居る様である。が實はそれ程に心底を打つ力を持ち得なかつた。その原因は、こうした浮世囃風な、絡み方は現代の觀客層の求めて居る映畫的興味さばかりの距離を感じることである。若く美しい未亡人が債務の爲に、銀行家に身を委すにしても、それが現實的に追らない。娘が母のこゝさを考へて、自分の破産を覺悟し乍ら、母の不義の子を自分の子とする心情にも尙領きにくい作りごとであるかの様な感じを受ける。時代の流れさといふのが、最早現在では古い「物語」でしかない内容が、殊更にお涙頂戴に焦つてゐる姿を曝露して居る。併し高見監督は熱心に其の古さを固守した。即ち「古風な造酒家」自「平和な古風な町の物語」の爲めに、其處に自動車に乗る未亡人や、洋酒を強ひる銀行支配人が現はれても、我々は「古風」を信じて黙殺しなればならぬ。演技者何れも熱演。

和山 滋

興行價値——鈴木澄子の未亡人といふだけで吸引力は相當ある。而も泣かせる所もかなり有るから呼物にはならぬ。(六月三日 淺草常盤座)